

田坂広志の風を語る

いま、政府が力を入れる「女性の社会進出」を促進する政策。それは、世界経済フォーラム等の国際機関も各国政府に提言し、世界的に大きな潮流となっている。しかし、この問題は、「男女格差の是正」「女性活用による経済成長」という視点の議論だけでよいのか？ 新たな時代の「女性論」について、田坂教授が語る。

TOPIC

人類史的なスケールで「女性原理」への回帰が起る時代

なぜ、「女性活用」の政策か？

灰塚 いま、政府は、「女性活用」の政策を強力に進めています。省庁での女性の幹部登用を進め、経済界に対しても同様のことを求めています。また、結婚・出産後も女性が活躍できる制度の整備にも力をいれています。たしかに、女性の立場で見ると、男女格差が是正され、女性の社会進出が促進されることは嬉しいことなのですが、「人口の半数の女性を活用することは、経済成長につながる」といった議論を聞くと、「女性活用は、経済成長の手段なのか」と、抵抗を感じる女性も少なくないと思うのですが、こうした政府の動きを、田坂先生は、どうお考えでしょうか？

田坂 たしかに、「女性活用」という言葉に抵抗を感じる女性が多いでしょうね。昔、臨床心理学者の河合隼雄さんが、京都の役所の壁に「高齢者対策」と書かれている垂れ幕が掲げられているのを見て、「我々老人は『対策』の対象か？」と憤慨したという冗談をおっしゃっていました。したが、「女性活用」という言葉に、そうした役所の「上から目線」を感じる人もいると思います。

灰塚 そうですね。そのエピソードは、何か共感を覚えますね……笑。

人類史的スケールでの「女性論」

田坂 もとより、現在の「女性」が活躍する社会を」という政策は、ぜひ進めて頂きたいですが、それが単なる「格差是正論」や「経済成長論」の視点から語られるだけでは残念です。実は、この問題は、「人類史的スケール」の視点から議論しておくことも必要と思います。

灰塚 「人類史的スケールでの議論」ですか？ その意味は……？

田坂 人類史に見れば、これから社会の原理は、「男性原理」から「女性原理」へのバランスシフト＝重心移行が起こることです。

すなわち、いまなぜ、「女性」が活躍する社会」が求められるのかと言え、男女格差を解消して、女性にも働く機会を与える、「女性を労働人口として活用する」といった意味だけではなく、「女性原理」がバラ

ンス良く重視された社会をめざす」という意味があるのです。

「男性原理」から「女性原理」へ

灰塚 「女性原理」という言葉を聞くと、平塚らいちようの『元始、女性』は太陽であった」という自信を想い出しますが、いわゆる、言語や理性、思考や論理、対立や行動などに重点が置かれる「男性原理」に対して、イメージや感性、感情や直観、調和や関係などに重点が置かれる「女性原理」のことですね？

田坂 そうです。この「男性原理」と「女性原理」とは、言葉を換えれば、「男性性」と「女性性」と呼んでも良いのですが、大切なことは、「男性」の中にも「女性性」があり、「女性」の中にも「男性性」があるということです。

従って、この「男性原理」と「女性原理」という言葉は、「男性が偉いか、女性が偉いか」という意味の言葉ではなく、社会や個人において、「男性原理」と「女性原理」がバランス良く働いているか、ということを問うているのです。

灰塚 つまり、現在の社会は、「男性原理」に重心が偏り過ぎていると……。

「女性原理」の色彩が強い日本文化

田坂 その通りですね。20世紀が「戦争の世紀」と呼ばれた背景には、ある意味で、この「男性原理」に偏った世界全体の姿があったと思います。21世紀に入っても紛争やテロが後を絶ちませんが、その背景には、自分と異なった価値観を受け容れない「一神教的」な世界観の対立があります。この「一神教」に象徴される男性原理的な世界観に対して、日本という国は、「八百万の神」「大乗仏教」という言葉に象徴されるように、多様な価値観を受け入れる女性原理的な世界観の強い国です。

21世紀、世界が真に平和な時代や調和した社会を築くことができるとすれば、まさに、この「男性原理」から「女性原理」へのバランスシフトが起こらねばならないでしょう。灰塚 つまり、これからの世界全体の平和や調和を考えると、日本という国が果たすべき、大切な役割が

田坂広志の風を語る

あると……。

田坂 ええ、歴史的に見れば、日本という国は、「和を以て貴しとなす」という調和の精神や、「千人の頭となる人物は、千人に頭を垂れることが出来なければならぬ」という謙讓の精神、「二寸の虫にも五分の魂」という弱者への共感の精神など、「女性原理」の強い文化や文明を育んできた国です。しかし、世界全体が、「男性原理」の強い文化や文明を持つ欧米中心の時代が続いてきたために、日本という国もまた、自国の持つ文化や文明の大切さを見失っている状況があります。

「女性が活躍する社会」の真の意味

灰塚 その「男性原理」偏重から「女性原理」回復へのバランスシフトは、国家や社会だけでなく、企業や個人においても起こらなければならぬということでしょうか？

田坂 その通りです。企業において女性活用が求められるのは、「男女格差の是正」や「女性の労働人口拡大」という目的だけではなく、先ほど灰塚さんが言われた、イメージや感性、感情や直観、調和や関係などの「女性原理」を重視する文化を、企業社会においても高めていく必要があるからです。なぜなら、20世紀の「工業社会」において求められたのは、ヒエラルキー組織、牽引型リー

ダーシップ、指揮・命令といった「男性原理」に彩られた企業文化でしたが、21世紀の「知識社会」や「ネットワーク社会」において求められるのは、フラット組織、支援型リーダーシップ、自律・創発といった「女性原理」の色彩の強い企業文化だからです。

灰塚 その意味で、女性の社会進出が進めば、企業組織においても、「男性原理」と「女性原理」のバランスが良くなっていくとお考えになるのですか？

「女性であること」を捨てる女性

田坂 そうですが、これまでの女性の社会進出の事例においては、少し懸念してきたことがあります。

灰塚 何でしょうか？

田坂 それは、女性が「女性を捨てる」ことによってしか、男性社会で活躍できない雰囲気があったことです。例えば、マネジャーに対して無言で「男性原理」のマネジメントを求める企業文化の中で、一人の女性がキャリアアップするには、「男性になる」しかなかった。その結果、「男勝り」で「内面的には男性」の女性にならなければ、なかなか活躍できない状況が永く続いてきました。

しかし、幸い、時代は大きく変わっています。最近、企業や社会で活躍する女性の中には、女性とし

ての魅力を失わず、そして、男性に媚びることもなく、自立した一人のプロフェッショナルとして活躍する人が増えていきます。

これは、言葉を換えれば、「男性原理」と「女性原理」を見事にバランスさせた女性が活躍するようになってきたということでもあります。

新しいスタイルの女性リーダー

灰塚 これまで田坂先生が会われた女性の中で、そうしたバランスを見事に体現している方は誰ですか？

田坂 もちろん、日本にもそうした女性はいませんが、世界全体を見渡すと、その筆頭に挙げたいのは、IMF専務理事のクリスティーン・ラガルドですね。私は、ダボス会議を主催する世界経済フォーラムのGlobal Agenda Councilメンバー

田坂広志

Hiroshi Tasaka

1951年生。74年東京大学卒業。81年同大学院修了。工学博士。87年米国パテル記念研究所客員研究員。90年日本総合研究所設立に参画。取締役等を歴任。00年多摩大学大学院教授就任。同年シンクタンク・ソフィアバンク設立。代表就任。03年社会起業家フォーラム設立。代表就任。08年世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilメンバー就任。10年世界賢人会議Club of Budapest日本代表就任。11年東日本大震災に伴い内閣官房参与就任。総理特別顧問として原発事故対策、原子力行政改革、エネルギー政策転換に携わる。著書は国内外で80冊。



農業・漁業など一次産業の再評価は、「女性原理」への回帰とも考えられる

でもあるので、毎年、ダボス会議に出席して、このラガルド専務理事に会っていますが、彼女は、並み居る男性に伍してIMFのトップとして世界の金融業界をリードしています。一方、そのままファッション雑誌のモデルになってもよいほど素敵なお人柄であり、実際に会うと、温かく、思いやりのある魅力的な女性です。

灰塚 ラガルド女史のことは、田坂先生の名著、『ダボス会議に見る世界のトップリーダーの物語』でも語られていますね。では、「女性原理」を大切にされた彼女のリーダーシップとは、どのようなものでしょうか？

田坂 彼女は、いわゆる「サーバント・リーダーシップ」を実践して来られた方ですね。今年のダボス会議のパネル討論でも、「私は、チームのメンバーを支援することに力を尽くしてきた」と言われていました。これは、統率・牽引を主旨とする「男性原理」のリーダーシップではなく、共感・支援を主旨とする「女性原理」のリーダーシップです。そして、これからの時代、このスタイルのリーダーシップが、女性だけでなく、男性にも求められるのですね。

「男性」にも求められる「女性原理」

灰塚 それで、男性の中にも「女性性」があり、女性の中にも「男性性」

があると言われる意味ですね？

田坂 そうです。男性も含めて、これからの時代のリーダーシップは、こうした共感・支援のスタイルに変容していかなければなりません。だから、「女性原理」への回帰ということとは、決して「女性」だけの問題ではないのですね。

灰塚 この「女性原理」への回帰ということとは、これからの社会全体で起こると考えて良いのでしょうか？

田坂 ええ、これから、様々な分野で、この「女性原理」への回帰が起こるでしょう。例えば、近年、我が国においても、農業や漁業という一次産業の再評価が起ころうとしています。これは、深いレベルで見れば、自然の恵みを感謝とともに受け入れるという意味で、「女性原理」への回帰の動きとも考えられます。

また、自然エネルギー普及への動きも、そうした「女性原理」への回帰と考えられます。

灰塚 それは、やはり「太陽光や風力」という自然の恵みを感謝とともに受け入れる」という意味で、「女性原理」だと言われるのでしょうか？

エネルギー政策も「女性原理」へ

田坂 もちろん、そうした意味でも、自然エネルギーは「女性原理」ですが、もう一つの意味は、「地域分散型エネルギー」だということです。

すなわち、これまでの我が国のエネルギー政策の中核は、大規模火力や原子力などの「中央集権型エネルギー」でしたが、この「中央集権型」とは、まさに「男性原理」のシステムです。これに対して、「地域分散型」の自然エネルギーは、「女性原理」のシステムと言えます。

かつて、エイモリー・ロビンズは、1970年代に、火力や原子力などに依存したエネルギー政策を「ハード・エネルギー・パス」と呼び、自然エネルギーに立脚した政策を「ソフト・エネルギー・パス」と呼び、前者から後者へのパラダイム転換が起こると予見しましたが、まさにこれは、人類史に見ると、「男性原理」のエネルギー政策から「女性原理」のエネルギー政策へのバランスシフトであるとも言えるのです。

灰塚 なるほど、「女性が活躍する社会」というテーマは、そうした人類史的スケールで見つめてみることも大切ですね。

インタビュー 灰塚 鮎子

Ayuko Haituka
経営者・著述家。新潮社、雑誌編集を経て、Elephant設立。心に注目した多様性社会におけるマネジメント手法HARDIAL(ハーディアル)を展開。また著述家としての一面も持ち、自身の哲学および四季折々の自然や心の有り様を、抒情的に現した詩を執筆。また目に見えない心の重要性や心を感じるコミュニケーションをテーマとしたコラムを担当。西日本新聞夕刊「わたし活性化計画」、WEBサイトFan Fun FUKUOKA「something special」に連載中。

